

幻想の協同を超えて 既存協同組合法の抜本的な改正を

島村 博
協同労働法制化
市民会議

協同集会の分科会「協同組合と労働組合の未来を語る」に参加した。双方の組合の間に共通の主題がある。地域社会への関与を通じた組合運動の発展というものである。双方に共通する利害・関心も、ここに認められる。だが、一般にそれぞれの組合が成立する法的枠組と農協等における労働及び労働者を強襲するリストラの暴風を想起すると、共通する主題を通じた双方の関心の運動化は、幻想に過ぎない。協同組合に即して述べよう。

ドイツ語で言う協同組合(ゲノッセンシャフト)の原意は封建的支配に対するブルジョアジーの闘争目的を総括するオルタナティブな政治的原理であった。原始共同体が解体し資本制生産関係が歴史的に生成する段階で成立した「古典古代的共同体」、「ゲルマン共同体」をM・ウェーバーもゲノッセンシャフトと称した。そこでは、自由な構成員による人格結合体としての自治、民主主義の基本的な要素が制度化されていた。彼がそれをゲノッセンシャフトと見なしたのも頷ける。

市民国家が、産業資本主義晩期において、協同組合を含め一般に法人制度を設計する段にこの要素を団体の基本骨格として採取したのは当然である。成立した法人は法制官による価値中立的な法技術的営為の所産ではなく、優れて政治的決断であったからだ。それを導く思想は、人は自由な人格の発展を保障する仕組として結社を必要とし、その設立を自由に保障しなければならない、というものである。しかし、後に民法学者が権利・義務の結節点として財産権の主体としてのみ法人を了解し、商法学者が市場の取引主体としてそれを徹頭徹尾企画するにおいて設計思想は抽象化、一面化、脱政治化され貧困化した。

わが国の協同組合法制は半世紀の歴史を経た。原始立法は占領下で日本官僚との角逐、^{かくちく}対抗を通しGHQのヘゲモニーの下で(農協法)、員外利用の禁止において決着した保革の妥協(生協法)として成立する。前者においてライファイゼン型からロッヂデール型協同組合への移行が農村社会の民主化の見地から政治決断される。その原基は1937年の「協同組合原則」である。そこでは人格的結合団体としての仕組が財産権のみを軸とする法人観に基づき組合員関係としてのみ構成され、歴史的制約をも有する協同組合観念が

定着する。

すなわち戦後の協同組合法の立法過程を精査すると、組合における労働、労働者を巡る論議が一度も登場していないことに驚愕せざるをえない。生産組合の一般的範型と意義づけうる企業組合法人を巡る論議でも同様だ。僅かに、雇用関係のない経営に光が当てられたが、雇用関係のない労働に視線が及ぶことはなかった。つまり、法制定を要求する側も、法制官も協同組合内の雇用労働、企業組合内の労働を意識せず、想定すらしていない。

他方で、異様な文言が目につく。「組合員への最大奉仕」(原始農協法6条、生協法9条)がそれである。この文言を含む箇条は組合 組合員関係における組合員の商品=貨幣関係に媒介される経済的、文化的促進と、組合の非営利性を根拠づける支柱とみなされている。それは、視点を変えると、組合 組合員関係を外部に対し、つまり地域に対し「アンガージュマン」(ICA第7原則)ではなく自らを封鎖する正当根拠となり、組合員第一主義(という名の経営第一主義)を天日の高みに据え、協同組合の何たるかを了解させる託宣となる。

労働を排除した協同組合の法的枠組に「最大奉仕」を据えると、いま協同組合で止め処もなく進展しているリストラ、外注化、パート・委託労働化は、すべて目的合理的な処理として組合の価値を放散するイデオロギーの後光に包まれる。協同組合は、組合 組合員関係において組合員に最大の効用を保障することによりその存在意義を自己確認するものだからである。概して経営責任者が心すべきことが団体利益の効用配分序列の厳守であるかぎり、経営的にはいかなる順位で犠牲を強いるかにおいて、その団体が現実に如何なる存在であるかを白日の下に晒す。効用配分の第一受益者は、営利会社では株主であり、協同組合では組合員である。だが経営危機にあつて労働の不正規化を選択する点で共通する。

非組合員労働者は、営利企業の労働者と同様に、協同組合法人の構成員としての地位を保有しない。悲劇的にも喜劇的なことは、一面で「アソシエーションとして組織された」組合員(総会、理事会)は協同組合労働者をよそ者として処遇する謂れを有する。営利企業と同様の貧困な設計思想に立脚しているからだ。故に、当該労働者が地域を語りうる前提は、経営参加の回路で労働する者の共通の利害・関心を組合に反映させるのみならず、「最大奉仕」の削除及び自らを内部化できる方向で、つまり現行の法的枠組を社会的協同組合に照準を合わせ再編成することにある。労協法要綱案はこの改正方向を嚮導、啓開する尖兵の地位に立つ。